「書くこと」の指導

授業レポート CLASS REPORT

― 書かなければならないwritingから書きたくなるwritingへ ―

山下敦子　Yamashita Atsuko　（岐阜市立明郷中学校）

① はじめに

中学校英語において，「聞く力」「話す力」をより正確でより豊かなものにするためには，授業において「読むこと」「書くこと」に今まで以上に力を入れて指導をしていくことが大切ではないかと考えます。今回は，そのうち，「書くこと」の指導の実践を紹介したいと思います。

数年前までの私は，50 分の授業の中で，「聞くこと」「話すこと」を中心に授業を行っていました。教科書の内容を発展させ，使う基本文や語彙，対話パターンを与え，それを何度も何度もペアで練習させたり，テーマを決めて自由に対話させたりしていました。

そういった授業の中で，生徒たちは，習った基本文を使って対話活動を楽しむことができます。しかし，数日後，数週間後には，その授業でできていた基本文や対話パターンを全く忘れてしまっていることも少なくありません。そこで一言，「前にやったのにもう忘れたの？」と嫌味を言うことになるのです。

一方，書かれた英文なら生徒の手元に残り，家に帰っても復習することができますし，次の授業で振り返ることができます。自分のものでも，仲間のものでも，何度でも見ることができます。書くことの指導を継続的に行っていく中で，生徒たちは書くことに対する抵抗がほとんどなくなり，活動に入ると同時にペンを運ぶことができるようになっていきます。これは，書けるようになったという自分の力の伸びを実感しやすいため，書くことに対して自信がついてくるからでしょう。

このように，今，目の前にいる生徒に少しでも自信を持たせたい，と常に考えています。英語に対しての自信をつけることが，英語を学ぶ意欲につながり，そして最終的には，実践的コミュニケーション能力を身につけることへつながると考えます。

② 楽しい writing

私自身は中学生の頃どんな英語を書いていたのだろう，とふと思いました。ノートが残っているわけでもないので（30 年ほど前のことですから），ただうっすらとした記憶に過ぎないのですが，ひたすら単語を書いたり，教科書の本文を何度も書いたりしていたと思います。自分でいうのもなんですが，まじめな生徒でしたから，そのような学習をしていても飽きることがなかったのでしょう。しかし今，生徒たちに，書く指導をしていくとき，それだけでは私自身がもの足りなくなります。もちろん，初期の段階は英語の正確なコピーから始まります。しかし，小学校で英語に触れてきている彼らとは，もっと楽しい writing を行いたいと思います。

私が考える楽しい writing の条件とは，以下の 3 点です。

① 書けそうだ（生徒全員が挑戦できる）
② 自慢できる（オリジナルが入る）
③ 書きたい　（生徒の意欲を駆り立てる内容）

③ 「書けそうだ」「自慢できる」

これは，ノート指導の中で行います。私の場合は，1 年生の最初の時期から，書く活動を取り入れています。ノートの左側には，教科書の本文を正確に写し，その下に単語を練習するように指示しています。そこまでは，家庭での予習です。正確に写すだけでいいのです。そして，授業で教科書の内容を読み取り，何度も何度も繰り返し読む練習を行い，その後，ノートの右側に，教科書の本文を自分のオリジナルに変えて書いていきます。例えば，以下の本文であれば下線部分を変えます。

Ken:　Hello. I'm Ken.
Emma: Hi. I'm Emma.

Ken: Are you from Australia?
Emma: Yes, I am.
My friend, Ratna.
Ken: Hello, Ratna.
Ratna: Hello, Ken. I'm from India.
（*NEW CROWN 1* Lesson 1 ②より）

この活動は，入門期の段階から行います。正確に写すことが精一杯の生徒も中にはいますが，上記の英文なら，３人の登場人物の名前と出身地を変えるだけでできます。この対話ならば，speaking を行うのが普通でしょうが，小学校からお互いに知っている仲間同士ではなかなか面白い活動にはなりません。したがって，私の場合は，あえてこの段階から書くという活動を入れているのです。小学校から来た彼らにとって，英語を書くということはむしろ新鮮です。多少の抵抗もありますが，名前と出身地だけ変えればいいんだという安心感で，活動に入ることができます。さらに，出来上がったものを使って仲間と交流するときにも，たったこれだけの対話文ですが，名前で盛り上がったり，国の名前で盛り上がったりします。自分で書いたものを誰かに見せたくてしかたがなくなるのです。

しかし，この段階でも指導しなければならないことは隠されています。：（コロン）の使い方です。指導しないと３年生になっても，対話文のときに Ken「Hello. I'm Ken.」と日本語の括弧を用います。また，speaking では発見できなかったミスも発見することができます。クラスに１人ぐらい，人名の前に 'a' を入れている生徒が見つかるのです。speaking で練習したり，音読練習を何度も重ねたりしても，ミスが出てしまいます。書く活動を通して，個々に指導をしていくことが大切です。

１年生も２学期頃になると，３人称単数現在形を学習し，表現の幅が広がってきます。また，現在進行形を学習することによって，現在の状況を描写することができるようになります。次の教科書の本文も，一部分を変えればオリジナルになります。

Paul: This is my sister, Nancy.
Kumi: What is she doing?
Paul: She's working at a hospital near her high school.
Kumi: Is she a nurse?
Paul: No, she isn't. She's a candy striper.
Kumi: What?
Paul: She's a volunteer. She helps the nurses.
（*NEW CROWN 1* Lesson 7 ③より）

この頃になると，教科書の本文の数よりも多くの文章を書くことができるようになるので，

Paul: This is my sister, Nancy.
Kumi: Oh, she is very tall (beautiful/ cute).
What is she doing?

などと，対話の流れを崩さないように，内容を膨らませていくことができます。

活動の中で，生徒が表現したいと思ったときに，語彙を教えていきます。しかし，準備がないと，「先生，先生！」という声に振り回されてしまうので，あらかじめ語彙を用意しておきます。さらに生徒が聞いてきたときには板書するようにします。そうすると，質問できなかった生徒も，自分で語彙を選んで１文追加できます。自分自身で考えて追加した文章を「先生，できた！」と言ってうれしそうに報告する生徒もどんどん増えてくるので，仲間と交流をさせると，さらに刺激し合って，もっと文章を作ろうと思うようになります。この活動を継続することで，生徒は，書くことに自信をつけていきます。

④ 生徒が書きたくなる内容とは？

学年が進むにつれて，「何となく書く」とか，「練習のために書く」では，生徒の学習意欲を駆り立てることはできません。教科書で学習したことを利用して，心が動いたことを英語にするときに，彼らの書く文章の量はぐんと伸びます。もちろん誰に伝えるのか，なぜ伝えるのかということは大事な要素です。しかし，毎回の書く活動に必然性を持たせることには無理があります。ALT に読んでもらうためでもなく，外国に送るわけでもない。そんなときに，なぜ書くのか？　その必然を飛び越えるものは，心だと思います。

英語の授業は，英語の力をつけていくために行っています。体育の授業も同じだと思います。体力をつけるため，バランスのとれた体を作るために授業を行うのでしょう。バレーボールをやる必然性？

50 m走のタイムを縮める必然性？ きっと問題にしないでしょう。生徒は，純粋に「勝ちたい」「速く走りたい」という気持ちで授業に取り組みます。そのときに，「どうしたら勝てるか」「どうしたら速く走れるようになるか」を体育の授業で学習するのでしょう。もう一度英語の授業に置き換えたときに，活動に対して常に必然性をこじつけなくてもいいと思います。それよりも，「書いてみよう！」という気持ちを持たせることが大事だと思います。

９月に体育大会がありました。多くの学校で行われている行事でしょう。そして，多くの中学生がこの日１日燃え，感動し，涙するのではないでしょうか。本校の生徒もそうです。特に３年生の生徒たちの感動は，１，２年生とは全然違いました。最後の体育大会ということもあり，必死で競技に参加し，下級生の競技を応援し，勝ってはクラスメートと喜び，負けて涙していました。その次の日，３年生で優勝したクラスは，ハイテンションの中にも隣のクラスを気遣う雰囲気。負けたクラスは，悔しさを噛みしめながらも，これからがんばるぞという雰囲気。授業では，次のような導入をしました。

“Thank you for making me and my class happy. I was really moved by your words, your voice, your performance and your tenderness. Thank you very much.
I want you to write your feeling in English. I want to tell that to my students (1st graders).”

書き始める前に，次のことを確認しました。

① 使いそうな語彙
② 使いそうな動詞の過去形
③ 既習の構文を意識して使うこと
④ 主語と動詞をしっかりと考えること

生徒作文（※添削前の原文）

I didn’t know that we made many people happy, moving. I’m happy to hear this news.

I cried very much yesterday. I shed tears. But the tears weren’t sad tears. The tears were happy tears, because I didn’t regret.
I ran, jumped, and cheered very hard. So I was very satisfied.

Our bond in Aodan was the deepest of all. I could believe my team mates. I felt happy to be in Aodan.

When I will grow up, I don’t forget this Sports Day. This Sports Day is my important memory. I want to say ‘thank you’ to cheer leader.

I love Aodan. Thank you!

実際に書くことに費やした時間は，35 分ほどでしたが，クラスの半数以上が，この程度の文章を書くことができました。負けたクラスも，勝ったクラスも，どの生徒も真剣な表情で書く活動に取り組むことができました。既習の構文を利用することで，文を構成することはある程度でき，そして，まとまった文章を書くことができることに満足できたようです。このように感動したものがあれば，活動に必然性を持たせなくても，生徒はその活動に入りやすくなるのではないかと感じています。

5 おわりに

３年生が書いた文を，１年生の生徒に見せました。１年生の生徒は，見せられても何が書いてあるか，簡単にはわかりません。しかし，３年生の先輩が，英語を使ってたくさんの文章を書いていることに驚きます。同時に，「自分も３年生になったら，こんなふうに書くことができるようになるのかな，書けるようになりたいな」というあこがれの気持ちを持ちます。１年生は，体育大会の取り組みを通して，３年生の先輩の強さや優しさを見ています。そんな３年生は，やっぱり英語の授業でも頑張っているんだという先輩を尊敬する気持ちを高めることになりました。クラスの仲間の書いた文章によって，意欲が高まることもあります。違うクラスの作品を紹介することで，その仲間から表現を学ぶこともできます。そして，このように学年を超えて，刺激をし合うことができます。仲間，先輩，後輩がいる学校という環境で，中学生という多感な時期の生徒の意欲を駆り立て，英語の力をつけていくために，日々の実践をもっと工夫していきたいと考えています。